

青矢号のぼうけん

ジャンニ・ロダーリ作
杉浦明平訳



岩波書店

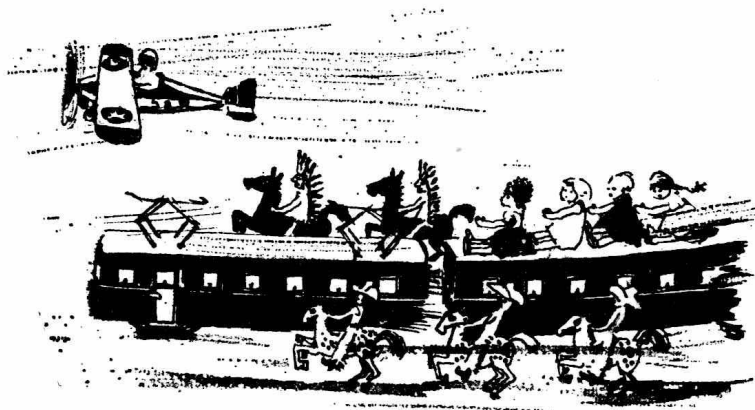
青矢号のぼうけん

ジャンニ・ロダーリ作

杉浦明平訳

M・E・アゴステイネルリ絵

岩波書店



970 ロダーリ, ジャンニ

青矢号のぼうけん ジャンニ・ロダーリ作 杉浦明平訳
M・E・アゴスティネル絵

岩波書店 1965

248p 23cm (岩波おはなしの本) 小学2~4年

(参考) Rodari, Gianni : La Freccia Azzurra, 1964.

岩波おはなしの本

■青矢号のぼうけん

定価五〇〇円

一九六五年七月十五日 第一刷発行 ©

訳者 杉浦明平

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

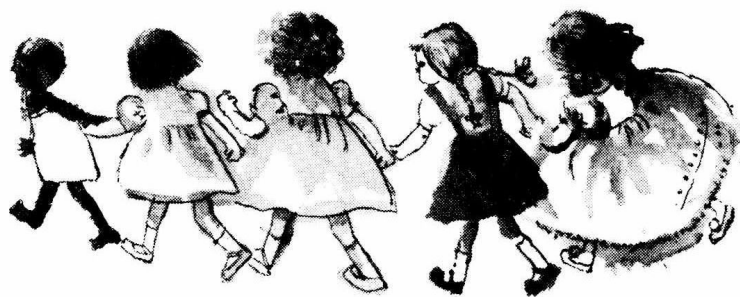
株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・見返・箱印刷 錦印刷株式会社

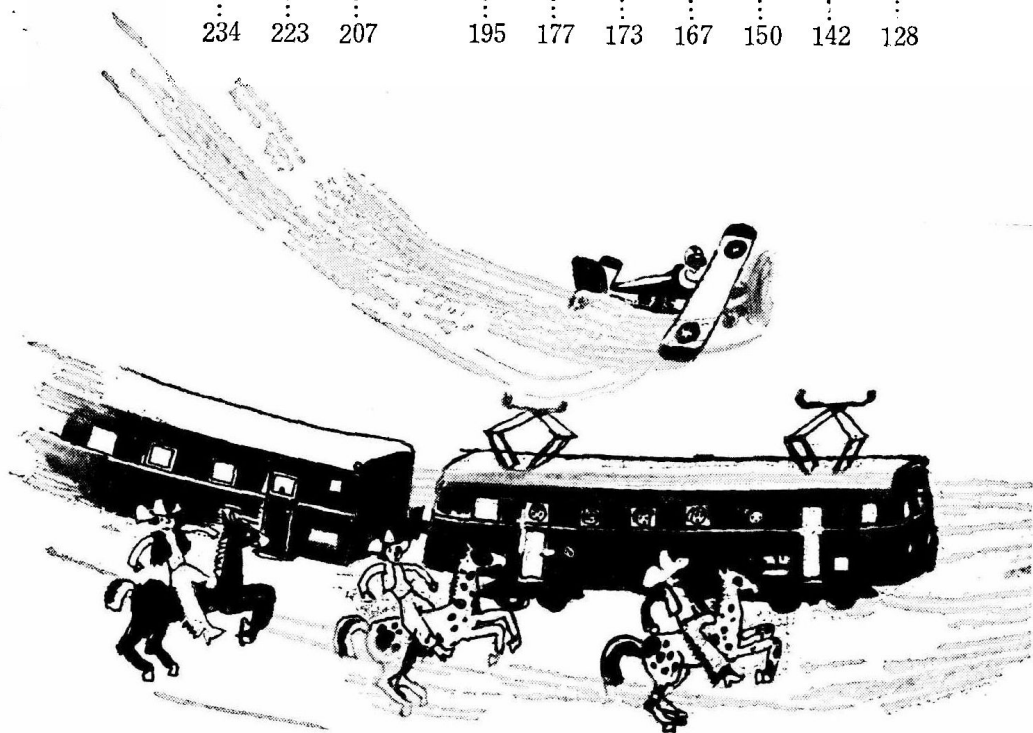
も
く
じ



12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
座り飛行士の着陸	おしゃべり銅像	將軍の英雄的最後	バラ人形よ、さようなら	橋の上の警戒警報	黄いろグマが下車します	出発！	スピッツにまかしておけ	駅長さんにはいい知恵がうかびません	フランチェスコ	青矢号	ベファアーナおばさんの店
.....											
115	103	89	80	70	52	44	37	34	26	16	9



23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
銀羽根酋長の計略 ぎんばねしゆうちようけいりやく	三人組あやつり人形の心 ぐみにんぎようこころ	フランチェスコのぼうけん	案内役のオートバイのり あんないやく	半分ひげ船長が航海にのりだします はんぶんせんちようこうかい	パステル箱のふしぎな物語 ぱすてるばこものがたり	踏切番小屋二十七号 ふみきりばんこやごう	ベファアーナおばさんは やりかたを心得ています べふあーなおばさんは こころえ	スピッツが死にたくなります スピッツがほえることをおぼえます スπιツがほえることをおぼえます	友情とはなんでしょう ゆうじよう	訳者のことば やくしや
128	142	150	167	173	177	195	207	223	240	245

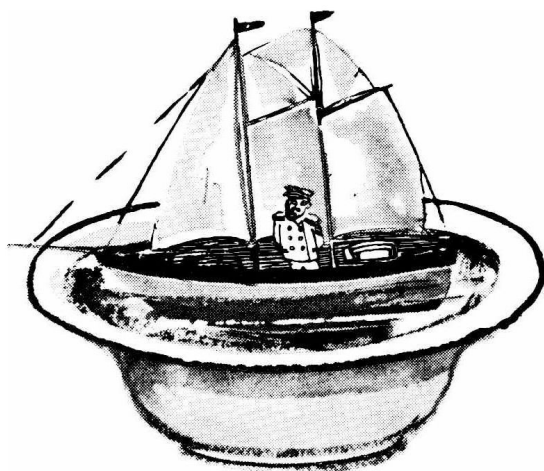




よる
夜じゅうべファーナおばさんとテレサとは屋根や煙突をぐる
ぐるまわって、おとくいさんにおくりものをとどけてきました。

青^あ矢^お号^やの^{ごう}ぼ^{ごう}う^{ごう}けん

杉^{すぎ} ジ^ジヤ^ヤン^ンニ^ニ・ロ^ロダ^ダー^ーリ^リ
浦^{うら} 明^{みん}平^{へい}訳^{やく}作^{さく}



ベファナーナお婆さんの店^{みせ}



ベファナーナお婆さんは、ひじょうに有名^{ゆうめい}で家が^{いえ}らのい
いお婆あさんで、まるで男爵夫人^{だんしゃくふじん}みたいでした。

「ふつうのひとたちは、」とお婆さんはときどきひと
りごとをつぶやきました。「わたしをかんたんにベファ
ーナ、ベファナーナとよぶが、まあ、しかたありません。
わたしは文句^{もんく}はいいませんよ、やっぱし無知^{むち}な人びとは
大目^{ひつよう}に見てやる必要^{ひつよう}がありますからね。でもわたしはだ
いたい男爵夫人^{だんしゃくふじん}なみなのです。教養^{きようよう}のあるかたなら、そ
のことをござんじですわ。」

「そうでございますとも、男爵^{だんしゃく}のおくがたさま。」と
女中^{じょちゆう}のテレーサは賛成^{さんせい}しました。ごきげんをとるため
です。

「わたしはすっかり男爵夫人^{だんしゃくふじん}そのものというわけじゃ
ないけど、不足^{ふそく}するところはごくわずかですよ。そのち

がいなんてちつとも見えやしない。見えて？」

「いいえ、おくがたまさ。」

それはちょうど主顯祭しゅけんさい（一月六日）の朝あさでした。（イタリアでは主顯祭をベファアーナの日ともいって、その晩ばんベファアーナおばさんというおばあさんが、サンタクロースのおじいさんのように、子どもにおくりものをくばってまわると、つたえられています。）夜よるじゆうベファアーナおばさんと女中じよちゆうとは、屋根やねや煙突えんとつをぐるぐるまわって、おとくいさんにおくりものをとどけてきたのです。ふたりのきものはまだ雪ゆきと氷こおりにべつとりとおおわれていました。「ストーブの火をおつけ。」とベファアーナおばさんはいいました。「さあ、からだをかわかそうじゃないの。それでほうきをもどしておおき。もう一年のあいだ、いりませんからね。」

テレーサは、いつものすみっこにほうきをもどしながら、こうつぶやきました。

「ほうきにのって飛びまわるなんて、けっこうなことでしょう。でも、飛行機ひこうきとジェット機き時代のいまじゃ、ぜんぜんおとくじゃないみたい。うろちよろしているあいだに、かぜをひいちゃったようだね。」

ベファアーナお婆さんは、めがねをかけて、机つくえの前の黒い皮かわばりの古い安楽あんらくいすに腰こしかけながら、「おいしいカミツレ茶ちやをだしておくれ。」といいつけました。

「すぐしたくいたします。おくがたさま。」と、女中じょちゆうは、かぜをひいたネズミのような小さなかすれ声こゑをだしました。ベファアーナお婆さんは、感心かんしん々々というような目つきで女中じょちゆうのほうをながめました。

「この女はちよつとやぼったい。」とお婆さんはかんがえました。「けれど、上流社会じやうりゆうしやかいの規則きそくをのみこんでいるし、わたしのような、男爵夫人だんしやくふじんといつてもいい身分みぶんの高い貴婦人きふじんを相手あいての、お行儀ぎようぎも、心得こころえている。月給げつきゆうをあげてやると約束やくそくしてやりましょう。あとになれば、むろん、月給げつきゆうをあげたりはしないでしょうよ、ほんとにき。こんなにお金がないんですもの、ほかにしょうがないものね。」

ベファアーナお婆さんはためいきをついて、大きな帳簿ちやうぼの中に鼻はなをつっこみました。

「さあて、ちよつとごらん。ことは、あきないがさっぱりで、お金もちよつぴりだよ。だれもかれも、ベファアーナから、上等じやうとうのおくりものをほしがっている。が、支払しはらいのことになると、話はなしがべつなんだよ。みんな約束やくそくはする、まるでベファアーナが鬼おにばああかなにか

のように帳面^{ちやうめん}にサインをする、それからあとは見たとおりさ……。でもね。けっきよくは、こぼしたつてはじまらない。陳列^{ちんれつ}しておいたおもちゃは、みんなくれてやつちまったから、きようはほかのおもちゃを物置^{ものおき}から持ちださなくちゃならないよ。」

おばさんは帳簿^{ちやうぼ}をとじて、配達^{はいたつ}からもどったその朝^{あさ}、郵便受け^{ゆうびんうけ}にはいつていた手紙^{てがみ}の封^{ふう}をひらきはじめました。

「さあ、あそこでも、」とつぶやきました。「わたしの思^{おも}っていたとおりだよ。わたしがせつかく肺炎^{はいえん}の危険^{きけん}をおかして、品^{しな}ものをとどけてまわったのに、だれもぜんぜん満足^{まんぞく}していないんだよ。この子は木のサーベルはいらない、ピストルがほしいんだって。でも、ピストルは千円^{せんえん}以上もするんじゃないの。つぎの子は飛行機^{ひこうき}がほしかったんだってさ。とほうもない！ その子のおやは、合計^{ごうけい}三百円^{ひやくえん}買^かってくれた。三百円^{ひやくえん}にどんなものをプレゼントしたらよかったのさえ。」

ベファーナおばさんは、手紙^{てがみ}を箱^{はこ}の中にほうりこみ、めがねをはずして、呼^よびました。

「テレーサ、カミツレ茶^{ちや}はできたかい。」

「すぐ、すぐでございます。おくがたさま。」

「ラム酒を一滴いれてくれたかい。」

「二さじ、おいれました。」

「大げさな。一さじ半でじゅうぶんだったのに。どうしてラムのびんがもうからっぽになつたか、いまやつとねかつたよ。たった四年前に買っただけなのにねえ。」

ただおばあさんだけがやれるように（しかもおばあさんたちは、おまえさんたちでもやってやれないことはないんだよ、といつてみせるにもかかわらず）、やけどもせず、沸騰するカミツレ茶をすすりながら、ベファアーナおばさんは、じぶんのせまい領地の中をうごきまわっていました。あちらこちらをながめすかして、台所やお茶の間やぼろ店や寢室のある二階に通じる木のはしごをじろじろと、すみからすみまでしらべるのでした。

なんとというあわれな店でしよう。よろい戸がおりており、シヨウウィンドはからっぽですし、戸棚にはただからっぽのボール箱と紙くずがつまっているだけです。

「物置の鍵と、ロウソクをしたくしておくれ。」と、ベファアーナおばさんがいいました。「ほかの品ものをもつてこなくちや。」

「でもおくさま。きょうのようなお誕生日にまでおはたらきなさるんでございますか。」

（ベファアーナの日にはベファアーナお婆さんの誕生日でした。）

「じゃ、お祭りまつりの日には何も食たべないのかい。」

「きょうあたり、だれが買かいものにくるもんですか。もう主しゅけん願がん祭さいの夜よるもおわってしまいましたわ。」

「わかってるよ。でも、たった三百六十五日たてば、つぎの主しゅけん願がん祭さいがくるからね。」
たぶんベファアーナお婆さんの店みせが一年じゅう開ひらいていたということを、説明せつめいしておくほうがよいでしょうね。そのガラス窓まどには、いつもあかりがついていたので、子どもたちはあれやこれやおもちゃにうつとり見みとれてしまうことがあったし、親おやたちはそれを買かってやれるようにふところ勘定かんじようをしたものです。

そのうえ、ありがたいことに、毎日まいにち々々まいにち誕生たんじよう日びというものがあります。ごぞんじのように、子どもというものは、じぶんの誕生たんじよう日びをおくりものをもらうのにもってこいの日だとかんがえています。

だからいま、ベファアーナお婆さんがこの一月六日からつぎの一月六日までどんなことをしてすごすか、おわかりでしょう。お婆さんはそのちっぽけな店みせに立たって待まっているので